

2026年度 入試問題分析シート

一橋大学

前期日程

科目

歴史総合・日本史探究

総括

試験時間	120分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	商125点, 法・経済160点, 社会230点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

I・IIは基本問題。IIIは歴史総合からの出題で、世界史（歴史総合・世界史探究）と共通する問題であった。問1が世界史選択者向け、問2が日本史選択者向けの設問で、いずれの選択者に対しても配慮がなされていると評価できる。

- Iは中世からの出題が中心。2年続けて古代・中世を中心とする出題であった。
- 2年ぶりに戦後史から出題された。
- I・IIIでは史料が引用された。Iで法然の一枚起請文と蓮如の御文、IIIではグラフの出題もみられた。

〈特記事項・トピックス〉

- Iの問2は、史料の読み取りと教科書の内容を組み合わせなければ高いレベルの答案が作成できない問題であったが、他の設問では、前年度まで出題されていた実験的な試みがみられなかった。大学入試問題として非常に好ましい。
- 過去に取り上げたテーマを利用した問題があることは、本学の特徴の一つである。本年度はIIの問4がそれに該当した。
- 本年度の設問は、すべて教科書の内容を理解していれば解答できるものであった。問いかけ方も明確であり、大学入試問題として好ましい出題であり、良問揃いであった。

〈合格への学習対策〉

- 本学では頻出のテーマがあるので、学習対策としては、やはり過去問研究が不可欠である。教科書の記述で解答を作成できる設問が多いので、徹底した教科書学習が有効である。
- 過去問と同様の出題があった場合、いかに短時間で処理できるかが重要なので、過去問の復習を徹底的に行うことが必要である。
- 「教科書の内容を理解する」ということは、意味のわからない用語を暗記したり読み飛ばしたりすることではない。知らない用語は国語辞典や用語集で意味を調べて理解しながら、くり返し読み込んでいくことが重要なのである。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	記述 論述 400字	中世から近世初頭の仏教における権力および民衆との関係 問1 源信の著作の名称 問2 法然の仏教思想とその影響 問3 鎌倉・室町時代の臨済宗(指定語句あり) 問4 蓮如が布教した宗派の名称および方法と寺内町 問5 豊臣秀吉が仏教諸宗派に千僧供養への出仕を命じた意義	問2～4は、中世の仏教に関する基本事項を論じさせる設問で、教科書を丹念に学習していれば解答できる。問5は、近世社会の特質を問う本学らしい設問だが、全体的には教科書に対する正しい取り組み方(合格への学習対策③参照)が実行されていれば答えられる良問といえる。	やや易
II	記述 論述 400字	昭和恐慌期の財閥系銀行のドル買いとその影響 問1 団琢磨を殺害した組織の名称とその設立者の氏名 問2 金輸出解禁時の大蔵大臣と金輸出再禁止時の大蔵大臣の氏名 問3 ドル買いにより銀行が利益を上げられる理由 問4 金本位制の確立・停止・復帰・再停止の目的	問1・2は基本問題。問3は、外国為替相場における円高・円安について理解できていないと難しかったかもしれない。問4では金本位制の変遷が問われたが、②の目的を論じさせる設問はきわめて稀である。とはいえ、本学向けの対策に力を入れていけば高得点がねらえる大問である。	やや易
III	論述 400字	第四次中東戦争と第一次石油危機 問1 アラブ側が石油戦略を用いた背景と第一次大戦終結以降のアラブとユダヤの関係 問2 第一次石油危機以降の日本経済とエネルギーをめぐる環境	問1で、第一次大戦後の動向についてどの程度字数を使うかがポイント。問2のキーワードとなる高度経済成長の終焉・狂乱物価・スタグフレーション・減量経営・省エネについて、丁寧に書こうと思うのであれば、問1の大戦後の動向は軽めに書くのがよいだろう。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。